

「吉備津の釜」の構想について

吉 江 久 弥

- 一、「妒婦」の意味
 - 二、磯良と正太郎
 - 三、磯良と井筒
 - 四、表現の対比
 - 五、典拠論
 - 六、補強——陰陽師の趣向
- 注(一)(二)

上方読本の名作というに留まらず、近世文学の代表作と称して誤りでない上田秋成の『雨月物語』、その中でも有名な作品「吉備津の釜」の一般の読解が未だに不定であるのは、その原因が肝心の「妒婦」の理解不十分にあると思われるので、先ずその点から筆を起こし、女主人公磯良の性格分析に及んだ。その上で主人公正太郎との人間関係を考察したが、この作品と多くの点で類似する先行作品、西鶴の『諸艶大鑑(一名「好色二代男」)』の中の「反古尋て思ひの中宿」があることから、夫々の作品の登場人物のあり方と筋運びとを比較してみた。そうしてみると従来の構想論の不当であることが明らかになって来たので、更に西鶴の他の作品が補強に用いられたらしいことを加えて、「吉備津の釜」の全体が西鶴の二作品を下敷として構想されたものと考えてみたのである。

一、「妒婦」の意味

「吉備津の釜」は『雨月物語』九篇中の圧巻である。というのには、怪異を描いて比類のない迫真性を持つからである。『日本古典文学大辞典』（岩波）の解説によつて、先ずその内容を概観しておく。

吉備国庭妹^{にいせ}の里の豪家井沢家の嫡子正太郎は、吉備津神社の社家の生れである妻の磯良の純粹な愛情を裏切つて、遊女の袖と播州に駆落ちする。磯良はそれを怨んで死病の床につく。やがてその怨念は袖をとり殺し、ついで死霊となつて正太郎を襲う。陰陽師の指図どおり四十二日の嚴重な物忌に服した正太郎が、何心もなく外へ出て、一声の悲鳴を残して消え失せる。残るのは夥しい血と、軒にかかった髻だけであつた。

（高田衛）

怪異描写はこの最後場面が特に優れているが、この他にも磯良の死霊が野中の草屋で青ざめた姿を覗かせる場面がある。

言う迄もなく磯良の嫉妬がこれらの怪異を現出させるのであり、それが作品の眼目なのであるから、これは「妒婦

の物語」と称してもよい作品である。作品自体が次の冒頭文から始まつている。

妒婦の養ひがたきも。老ての後其功を知ると。咨^あこれ何人の語^{ことば}ぞや。害^{わざはひ}ひの甚しからぬも商^{あたらひ}工^{わざ}を妨げ物を破りて。垣^{こゑ}の隣の口^{くち}をふさがたく。害^{わざはひ}ひの大なるにおよびては。家を失ひ国をほろぼして。天が下に笑を伝ふ。いにしへより此毒にあたる人幾許^{いくばく}といふ事をしらず。死^して蟬^{せみ}となり。或は霹靂^{はだか}を震ふて怨を報ふ類は。其肉^{しし}を醢^しするとも飽べからず。さるためしは希なり。夫のおのれをよく修めて教へなば。此患^{うれひ}おのづから避べきものを。只かりそめなる徒^たことに。女の慳^{かた}しき性^{さが}を募らしめて。其身の憂をもとむるにぞありける。禽^{きん}を制するは氣にあり。婦を制するは其夫の雄々しきにありといふは。現^げにさることぞかし。

便宜上傍線を施したが、その箇所までは『五雜俎』から例を引いて妒（妬）婦の害毒の恐ろしさを述べ、後の方はそれも夫の心掛け次第で未然に防ぐことが出来るのだと述べている。そして「現にさることぞかし」と続けて直ちに「吉備の国賀夜郡庭妹の郷に…」と物語に入っている語気からは、この物語がその実例に他ならないことをしめして

いると思われるし、物語の結末からは、女主人公磯良の例がその「希なるためし」であることが領かれる筈である。

一読して明瞭に思われるこの文脈が、研究者の間ではどうもその通りに受け取られていないようである。最近私が読んだ元田与市氏の論文（平成五年四月発行『雨月物語の探究』第六章）には次のように結論づけられている。

前文では時代相を投影して、「妒婦」の「慳しき性」の害悪と夫の責任を説きながら、続く本筋ではたしかにそれを裏切つて「妒婦」も「慳しき性」もいっさい描かず、反対に（中略）被害者の立場（女性視点）を基調とした、あらたな淫夫糾弾の説話を語りだすのである。

また、

そこには「妒婦」へつきつけられた刃がないばかりか、もはや「妒婦」の存在さえない。あるのは、ただただ男性の責任、「奸たる性」の害悪だけなのであった。その意味で「奸たる性」が巣くう「正太郎」の断罪には、秋成にとつての理想的男性像（注「直き」「ますらを」と対極に位置する者への激しい批判がこめ

られていたのかもしれない。

これが最近の研究なのだから、この論調が恐らくは一般的に通っているのであろう。先に引用した高田氏の文に、「（男が）妻の磯良の純粹な愛情を裏切つて」と表現されているのは、一応はその通りであるにしても、「純粹な愛情」という表現からは元田氏の言う「女性⇨善、男性⇨悪」という図式が導き出されないこともないと思われる。

私は作品を右のようにには受け取らない。第一、登場人物を善悪に区別することは無理だと思うのである。尤も事の起りは正太郎の「かりそめなる徒こと」であり、それは「おのがままなる奸たる性」ゆえであった。その性と磯良の「慳しき性」である嫉妬心とが悲惨な結末を招いたというのがこの作品であつて、その過程における怪異とその描写とに作品の魅力の大半がかかつていると考えるのである。磯良が「慳しき性」の持主であつたという記述が作品中のどこにも見られないからといって、彼女が嫉妬心のない女であつたということにはならない。磯良が稀に激しい嫉妬心の持主であつたことは、作品に明らかなことであつて、それが行為となつて現われるまでは潜在していたまでのことである。従つて事は相互の「性」の引き起こした悲劇であつて、何れが善、何れが悪と決めつけられる筋のもので

はないと思うのである。

また「妒婦が描かれていない」と言われていることに就いて、只今述べた所と関連するが、「嫉妬」そのものについて誤解が一般にあるのではないかと思われる。『広辞苑』の説明では「嫉妬」とは、

- ① 自分よりすぐれた者をねたみそねむこと。
- ② 自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと。またその感情。

とあり、磯良の場合はこの②に当るかと思われるのであるが、突っ込んで考えてみると、磯良の怨みは夫正太郎その人へ終始向けられていて、夫の心が袖という遊女に移るとか、移ったとかという点はそれに比して軽いようであるから、②の説明を一步進めて「自分の愛する者（の愛情）を独占しようとする感情」と、この場合の「嫉妬」を解する方が妥当であると思われる。一般には自分の愛人に第三者（女）がいて、これに対する感情が嫉妬だと考えられており、元田氏が冒頭文に妒婦の害悪の恐ろしさが述べられているにも拘わらず「妒婦の存在がない」と言い切っているのも、この作品を男の裏切に対する報復の物語以外のものではないと受け取ると共に、嫉妬をそのように考えたか

らではないかと私には思われる。

妒婦は最初から妒婦なのではない。恋愛関係、あるいは夫婦関係に入ってから始めて潜在するものが一寸した弾みで顕在化するのであるということ、また自分と張り合う第三者が特になくても男の愛情を独占しようとする心もまた嫉妬と言い得るということ、この二点を考慮に入れることで作品の理解は従来とかなり違ったものになるのではないか、と思うのである。

二、磯良と正太郎

問題を二点に絞ってみたのであるが、第二点のことは後に実例を西鶴の作品で示すことにして、先ず潜在するものの顕在化のことについて述べよう。

「白峯」における崇徳上皇、「浅茅が宿」における妻の宮木、「青頭巾」における山寺の住持等は『雨月物語』の登場人物の中で、生前あるいは平素表面化しなかった深層の心が、死または一寸した切つ掛けで表面に現われることになる著しい例である。崇徳上皇のことは周知のことであるから省くとして、宮木は死後もなお帰って来ない夫を待ち続ける純情一途の「烈婦」であつたことが判るのに対して、山寺の住持は「篤学修行の聞え」あり、土地の人々にも信仰せられた阿闍梨であつたが、ある機会に可愛い童児

を愛するようになり、その子の病死後はまるで打つて変つて人間を貧り食う鬼となつた。この山寺の住持の在り方が磯良を考える上で参考になる。

磯良について本文には、その結婚前後のことが次のように書かれている。

○ うまれだち秀麗みづげにて。父母にもよく仕へ。かつ歌をよみ。筆に工みなり。

○ 夙ことに起。おそく臥て。常に舅姑おやおやの傍を去ず。夫が性さがをはかりて。心を尽して仕へければ。井沢夫婦は孝節きやうせつを感じたしとて歎なげびに耐ねば。正太郎も其志に愛てむつまじくかたらひけり。

つまり申し分のない貞婦と言うべきである。それが正太郎の「おのがまゝ、の奸たはけたる性」の故に、何時となく夫婦間が離反して、その度は急速に強まる。その度に應じての磯良が次のように書かれている。

○ 磯良これを怨みて。或は舅姑いかりの忿よそにに任て諫め。或ひは徒なる心をうらみかこてども：

○ (正太郎が父によつて禁固の身となると) これを悲しがりて。朝夕つふねの奴めも殊まに実まめやかに。かつ袖が方へ

も私ひそに物を飼わりて。信まことのかぎりをつくしける。

○ (袖の爲の路銀の工面を頼まれると) いとも喜うれしく。

此事安くおぼし給へとて。私におのが衣服調度を金に質かへ。猶香央かきだの母が許へも偽りて金を乞。正太郎に与へける。

必死になつてゐる磯良が痛ましい位であるが、結局歎されてゐたことが判ると、「今はひたすらにうらみ歎きて。遂に重き病に臥」し、次第に食物をもとらなくなり、命さえ危うくなつたのである。

あれ程懸命でなかつたらと、磯良が哀れである。全く間然する所のない貞婦と言うべきであるが、右の文に「怨みて」「うらみかこてども」「今はひたすらにうらみ歎きて」と、繰返し出て来る言葉と、怨む心を持ちながら色々と考えて執り成しているその行動とに、何か暗いものを私は感ぜざるを得ない。念の為に『古語辞典』(岩波)に當つてみると、

恨み・怨み―相手の仕打ちに不満を持ちながら、表立つてやり返せず、いつまでも執着して、じつと相手の本心や出方をうかがっている意。転じて、その心を行為にあらわす意。

と記述している。磯良にしても、「今はひたすらにうらみ歎きて」というに至るまでは、次々と「うらみ」の度が増して行ったのであろうから、その次々の行動が「純粹な愛情」からなされていたと考えるには無理がある。最初のうち正太郎が「むつまじくかたら」ったというのも、磯良が懸命につくしてくれる「其の志に愛でて」のことであつて、相互に心の通ひ合ったことを示す表現は特にないのである。

表面からは貞節を地で行つたように見える磯良であるが、内面はどうであらうか。僅かながらその性格の一端が窺える部分に、釜占が凶と出た時に母親の言つた次の言葉がある。

佳婿^{むしがね}の麗^{あて}なるをほの聞て。我兒も日をかぞへて待わぶる物を。今のよからぬ言^{こと}を聞ものならば。不慮^{すいろう}なる事をや仕出^{いで}ん。其とき悔るともかへらじ

「不慮なる事」を仕出かしてしまつたら取返しのかかぬことになる、と親が憂える程の性格というのは、かなり激しく一途なものと思われる——或いは異常神経の持主でなかったかとも思われるのだが、こういう性格を持った女の懸命な貞節ぶりであり、それが一つ一つ裏切られて行くこ

とで募る「うらみ」がどういふものであるか、それを想像してみることが決して無駄ではあるまい。

それと共に、次のことを考慮に入れる必要がある。即ち磯良は吉備津彦の子を始祖とする由緒ある家柄のお嬢様であつて、幼時から家風ゆえのプライドも知らず知らずのうちに育っている筈であり、それが先祖を武士とはしても三代前からの農家の一人息子^{いんしよ}の嫁になつて来たのである。また、当時の女性に課されていた、現代では考えることも出来ない道徳があつたということ、この二つは井沢家に嫁した磯良を考える上で無視できないことであると考えられる。後者の封建道徳については言う迄もないことであるが、西鶴の作品の女主人公の言葉を参考に引いておこう。

「(前略) 人間と生を請て。女の男只一人持事。是作法也。おのゝ世の不儀といふ事をしらずや。夫ある女の。外に男を思ひ。または死別れて。後夫を求めるこそ。不儀とは申べし。男なき女の。一生に一人の男を。不儀とは申されまじ。(後略)」(『西鶴諸国はなし』巻四の二「忍び扇の長哥」)

西鶴後百年といえども女性の自由を縛る道徳には厳しいものがあつた江戸時代である。家系正しい家柄の娘磯良に

はまして、この道徳が常識として身に染みていたことは当然である。

「この国の貴族」出の、「歌をよみ。箏に工み」な女が、「氏なき田夫」の息子の妻として懸命に仕えながら、忽ちにして無視されて行つたのである。プライドは傷付けられる、またそのプライドを保持するためにも、愛情があらうとなかろうと「一生に一人の男」である正太郎にどこまでも縋り付いて行かねばならぬ、その思いが「うらみ」を募らせると同時に、絶対に正太郎を逃すまいとする懸命な行為となつた、と見ることは誤りであらうか。そして更に、正太郎の出奔によつて完全な絶望状態に突き落された時の磯良の心情がどうであつたかを推測することもまた重要ではあるまいか。

このようなコンプレックスが激しい性格に溶け込んで行つた極まりにおいてこそ、物語の終局に見られるような、言語に絶する凄惨な死霊の働きが招來せられたのであり、このように見てこそ冒頭文の存在理由が肯定せられるのである。

これに対する夫、正太郎の方はどうか。

正太郎はもともと気儘な青年であつた。先祖が武士を棄てて吉備の国に移り棲んで以来の農事を嫌つた、ということとは、家業を継ぐことを嫌つたということになる。長男が

家業を継ぐということは、現在でこそ殆ど行われていないが、近時まで殆ど鉄則であり常識であつた。大正時代にあるの宮沢賢治がその事で父と激しく争つたことは周知のことである。今の言葉で言えば、正太郎も規範に従うことを欲しない、いわば自由人であつたと言ふべきであらうが、當時はとんでもない困り者であつた。その正太郎が酒色に耽つたというのは、正にそれ故であつたのだが、素質にその傾向があつたからでもある。このような青年と先述したような妻との間には、教養の上でも性格の上でも大きなギャップのあつたことは当然想像せられることである。

それでも正太郎は父母の言うままに結婚し、初めのうち暫くでも妻に優しくしたのである。しかしその自制は長く続かない。また元の木阿彌に戻つてしまふのであるが、妻磯良の先述した様な点を考えると、前文にいう「おのがまゝ、の奸たる性」だけにその故を帰するわけにはいかないと思われる。性格の大きな違いと言つてしまえばそれ迄であるが、彼には妻の行為が次第に煩わしくなり、仕舞には息が詰るように思われ、束縛となつて来たというのが真実であらう。妻が懸命になる凡てが自分を引留めようとする為の行為と受取られ、妻が懸命になればなるだけ被束縛感が強くなつた、と私は見る。何の教養も取柄もないような袖が、却つて息苦しさを救う唯一の安らぎの為の存在とな

つたのはそれ故であつて、彼が袖を「悲しき婦^{つま}」と言つた表現は、彼女の死後野中の墓地で逢つたある女の同情を引こうとして語つた言葉の中に一度あるだけで、二人の相互の感情などについては全く触れられて居らず、実に淡々と経緯が叙べられてゐるに留まる。

ちなみに袖について言ふと、磯良の怨みの主な対象でなく、邪魔者として先に片付けられた観がある。磯良が袖を軽く見ていたのは「蛇性の姪」の真名子と富子との關係に似ていて、豊雄との結婚直後の富子に乗り移つた真名子（蛇）は豊雄に向つて「こんなつまらぬ女と結婚する貴方が憎い」と言つて、富子を問題にしていな。その富子の間もなく病死してしまうのだが、要するに袖は作品を多彩にする端役と見てよいのではなからうか。

三、磯良と井筒

誰しも自分に内在する「性」には気付かない。それが事に當つて顕在化するというのが常である。磯良にしても「慳^{かたま}しき性」を内在させていたのが、正太郎の「奸たる性」の発露した「徒こと」によつて募つたのであつた。正太郎に大した罪の意識のないままであつたこと、それが「かりそめなる徒こと」であつた所以である。一方磯良の内面は先に分析した通りであるが、そのどこが「慳しき

性」なのであるうか。

その前に「慳」の意について見ると、ここに当るものとしては、

国 むごい。情愛のないこと。ぶあいそう。そつけないこと。邪険。「突慳貧」（『漢語林』）

がそれかと思われるが、『康熙字典』では「悋也」とある由。一般の注釈では「ねじけた性質」とするが、このままではよく判らない。秋成自身他の作品の中で、

凡人とうまれて。佛菩薩の教の広大なるをもしらず。愚なるまゝ。慳しきまゝに世を終るものは。其愛慾邪念の業障に攪^{ひか}れて。或は故の形をあらはして悲を報ひ。或は鬼となり蟒^{みづち}となりて祟りをなすためし。往古^{いんこ}より今にいたるまで算ふるに尽しがたし。（中略）されどこれらは皆女子^{をんな}にて男たるもの、かゝるためしを聞ず。凡女の性の慳しきには。さる浅ましき鬼^{おに}にも化するなり。（『青頭巾』）

と書いているのを見ると、それは女に固有の性で、仏教に浴することで消滅するものと考えているらしい。恐らく

は仏教思想の女性観に基づき、当時の社会や家庭における女性の置かれた状況から起る歪んだ心理状態を観察しての言であるが、磯良に当ててみると、上述した如き心の底にもこれがあつて、それがそうした心を生じさせているということになるうか。そして磯良の妒婦たる所以は、この夫をどこまでもわがものとせねばならぬという心と怨みとの心の加増したところにあつた、と考えられるのである。

同じく妒婦でありながら、磯良とはかなり違う心的要因を持つ女を主人公とした先行作品がある。西鶴の「反古尋て思ひの中宿」(『諸艶大鑑』巻七の四)がそれで、この作品は構成の上で御釜祓のを含む発端部分さえ除けば「吉備津の釜」と極めて筋運びが似ている。その詳細は後にして、先ず女主人公井筒に目を向けたのであるが、何はともあれ、作品内容を紹介することを先にする。

——この作品には江戸吉原の遊女屋甚左衛門と、伊左衛門抱の遊女井筒(太夫か)以外にこれといった人物は登場しない。もちろんあの袖に当る第三者は存在しない。この二人は最初法度を犯して忍び逢う間であつた。それが図らずも人に知れたので、甚左衛門は井筒を抱え主から貰い受け、晴れて同棲することになったのだが、そこで始めて井筒が嫉妬深い女であることが判る。日常生活

の上で困ることが忽ち相次ぐようになるのだが、甚左衛門は何とか一年余りも我慢し続けた揚句、ある日浅草へ行くと称して家を出、そのまゝ、剃髪し改名して、八百屋をやつて暮らしていた。

井筒は彼が法体した事を聞き知つて尼姿になり、必死に探し廻るうち不図したことでその八百屋を突き止め、再び同棲するのだが、甚左衛門は井筒がどうにも嫌で、恐ろしくて、今度は家出をして遠い駿河の国へ行く。その途中、富士山の朝雲の中に井筒が自分を見詰めて立っているのを見て、暫くだが氣絶した。

宇津の山陰で念仏三昧の生活に入ろうとして、彼が壁も生乾きのままの柴の戸に入つた大晦日のその夜から、井筒が幻を現して毎夜悩まし続け、その恐怖で死ぬばかりになった二月の末に、庵を散り埋めた木の葉の不思議な発火で、彼は庵と共に焼け失せてしまう。同日同刻江戸では井筒も眠るように死んだという。——

くだいようだが、此の作品には妒婦を描いた作品としては珍しく第三者が登場してはいないのである。また、この井筒を考えるに、明らかに妒婦ではありながらその日常生活は典型的な貞女のように描かれている。甚左衛門との関係においてのみ彼女は妒婦なのである。それは磯良と正太

郎との関係でも同様であろうが、井筒の貞女ぶりは次のように述べられている。

此女悪心にもあらず。形のあしきにもあらず。世間の人にもほめられ。万事かしこく。敷島の道迄も。心ざしふかく。ひとつとしてふそくなきに。我を大事に思ひ過。夏の夜もすがら夢もむすばず。枕近く居て団の風を絶さず。昼は稀なる白髪をなげきてぬき。宿を出れば帰る迄門に待託。現にも我を見ぬ間をうらむ。是は皆浅からぬ心からなるに。ふつとあきそめて。宛見る事うたてし。かゝる事も有物哉。(後略)

磯良の「信のかぎりをつくしける」「切なる行止」にも劣らぬ尽くしようであつたが、これが肝心の夫に通じなかつたこともまた磯良と同様であつた。

然し井筒の場合磯良と違ふのは「我を大事に思ひ過」という点で、それは常識を遙かに越えた愛情の行為であつた。磯良の場合は先に述べたようにモラル感が優先した行為であつて、愛情が育つには時期尚早であつた。第一井筒と磯良とは育ち方も身分も違ふ。井筒は遊女であつて、その出自は通常の場合卑賤であり、遊女なりの教養はあつても一夜妻の別称があるように男には馴れているのであるから、

甚左衛門には格別の愛情を持つていたと考えられる。その愛情行為が忍び逢いの間は甚左衛門にとって魅力であつたろうが、同棲することになると、異常に激しいそれが忽ち彼を苦しめることになったわけである。磯良が「夫が性をはかりて」仕えることが度を越すのは不自然であり、「袖が方へも私に物を飼」というのも遠回しに夫を束縛する出過ぎた行為と思われても仕方がない。それと同様に「宿を出れば帰る迄門に待託。現にも我を見ぬ間をうらむ」というのは、夫に息の詰る思いをさせる。

こうなると磯良も井筒も夫を自分の思いで束縛することになる点では変りがない。どちらも悪意ではさらさらないのであるが、夫の方では堪らなくなつて、それからの脱走を図るのも無理からぬ心理というものであろう。その点でもともと自制心の弱い正太郎は、間もなく酒色に溺れるという気楽な結婚前の日常に戻り、安息の拠り処とした袖を連れて播磨の国まで行つてしまふ。一方甚左衛門はもとと堅気の人らしく、酒色の道へということもなく、長い間辛抱した揚句家出をするということになるのだが、端的に言えば正太郎は窮屈な当時の女のモラルから逃げ、甚左衛門は過剰な愛情から逃げたということになるであらう。

四、表現の対比

前項には西鶴の作品を引合いにしてそれぞれの作品の主要人物について考察したのであるが、次に文章表現を借りて両作品の比較を試みよう。

(1)

正太郎の態度に応じて磯良がその心を引き出めようとして益々必死になり、遂になりふり構わぬまでになる。それに対応すると考えられるのが、甚左衛門一回目の家出後、井筒が七面の明神に百日詣でをして願掛けをする姿の激しさであろう。次のように描かれている。

めぐりあはせたまはずば。忽火竜の形となり。是なる御池に身をしづめんと。針百本を。毎日指の血をしぼりて。道芝を染めていのる。

(2)

正太郎が播磨の国荒井の里で袖の怪死の後、野中に幻出した草屋で見た磯良の死霊の姿。

あるじの女屏風すこし引あけて。めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまいらせんといふに。驚きて見れば。古郷に残せし磯良なり。顔の色

いと青ざめて。たゆき眼まなこすざましく。我を指したる手の青くほそりたる恐ろしさに。あなやと叫んでたをれ死す。時うつりて生出いでき。

これに対して江戸から駿河の国への途中で、甚左衛門が見た井筒の生霊の姿は、

空も静に山もほのかに。煙を見付し時。井筒情姿にて。面に雪をあらそひ。我を見つめし眼まなこさし。是はと消入くわんねん観念して。しばし程過ぎて見るに。其面影はなかり。

磯良の方の描写が詳細で、より凄い。その顔も手も青いのは病み衰えたまゝの姿ゆえであり、井筒は遊女風の立姿で顔は雲の様に白い。磯良は「つらき報の程」を云々と言うが、井筒はたゞ黙っている。しかし男はどちらも暫時気を失う。何れも印象的な場面である。

(3)

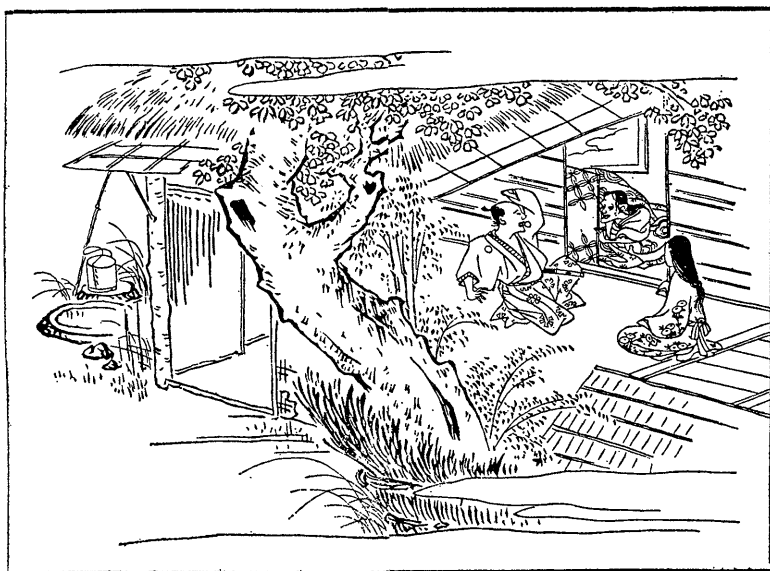
正太郎は袖の従弟彦六の家と壁隣の破屋に、陰陽師の戒めを守って四十二日間神仏を念じながら籠り、甚左衛門は六十日間俄作りの柴の戸に仏名を唱えながら籠る。

そして、どちらも籠った当夜から死に至るまでの夜毎夜

甚左衛門が井筒の幻を見る図
 (「反古尋て思ひの中宿」)



正太郎が磯良の死霊に逢う図
 (「吉備津の釜」)



毎、正太郎は死霊に、甚左衛門は生霊にそれ／＼脅かされて、両者ともに恐怖の度を次第に増して行く。前者の正太郎は、いつも朝になるのを待兼ねて壁隣の彦六に前夜の恐怖を告げており、文は詳細を極めるが、その長文は省略し、後者の場合だけを引用しておく。

井筒が形まぎ／＼とあらはれ。物いわぬ斗。夜ともになやまし。明れば影消て。又夜はかよひ。二月の末迄人にはかたらず。

(4)

正太郎の最後のさまは凄惨の極みで、その描写は古今の名文と称されているものである。

明たるといひし夜はいまだくらく。月は中天ながら影朧々として。風冷やかに。さて正太郎が戸は明はなして其人は見えず。(中略) ともし火を挑げてこゝかしこを見廻るに。明たる戸腋の壁に腥々しき血灌ぎ流て地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば。軒の端にもものあり。ともし火を捧げて照し見るに。男の髪の手ばかりかゝりて。外には露ばかりのものもなし。浅ましくもおそろしさは筆につくすべうもあら

ずなん。

これに對して西鶴は甚左衛門の最期を次のように、あつさりと言ふ。

二月の末迄人にはかたらず。おもひなして。後はやせおとろひて。おのづからかぎりもしるゝ時。家に木の葉埋込。火宅は今と焼うせにける。

この両者の相違は作家としての秋成と西鶴の資質の違いによるものであらう。西鶴が鋭敏な理性をもつて淡々と叙しているに對して、秋成は卓抜な想像力と異様と思われるまでの感性を働かせて独自の創造を完成させているのである。人間心理の洞察において、しかし二人は通俗作家を絶する深さを見せていると思われる。

なお右の二つの文から考えられることは、先ず甚左衛門がこの形で形骸を残さずに死に、同時刻に遠隔地の江戸で井筒が眠る様に安らかに死んだというのは、井筒の甚左衛門をわが物にしたいという激しい思いが完全に果されたことを示すのではないかということであり、この見解をもつて類推すれば、正太郎の右の如き無残な最期の後に「夜も明てちかき野山を探しもとむれども。つひに其跡さへなく

うか。

五、典拠論

前項のように何箇処かを並べて見て来ると、それがそれぞれの重要な箇処であるだけに、「吉備津の釜」という作品が「反古尋て思ひの中宿」を下敷にして作られたものではないかと思われてもくる。妒婦の有りようといい、結婚後の筋運びといい、それ程よく似ている。それで此の作品の典拠ということに少し触れておくことにしたい。

周知のことに属するが、最初西鶴に始まる浮世草子を手懸けていた秋成が、一転して、怪談の形を借りながら身分や性別に係わらぬ人間本来の心の深層を描いたというには、怪談集を既に二度も出している医師の師都賀庭鐘の影響が考えられる他に、国学者でもあつた幕臣加藤宇万伎との接触が彼に古代の素朴な精神に対する目を開かせたことがあると考えざるを得ないが、その『雨月物語』の執筆に当たっては、中国種のものや日本の古典を盛んに駆使している中でも傑作「吉備津の釜」には目立って多くの典拠が指摘されて来ているのであるが、多くは部分的な指摘で、それも怪異の部分に集中しており、作品全体の構想に係わるものは皆無と言つてよい。

なお井筒は甚左衛門を「こがれ」たのであつたし、最初江戸の外まで探しても彼を見付けることが出来ず「さては国遠と恨をなし」たのでもあつたのだから、最後にその「恨」はかなり深まっていたことが考えられる。しかし彼女は生霊をもつて男を死の道連れにしたのであつたに對し、磯良は鬼となつて男を自分の中に取り込んだ。人死んで心を司る魂は昇天して神となり、形体を司る魂は鬼となるというから、磯良の「鬼」もなお地に留まり、怨みの「鬼」があのようにして独占の思いを遂げたと考えるべきであらう。

たゞ一つ鶴月洋氏が近似性の上で参考に引いた『善惡報

ばなし』（吉田幸一氏によると元禄六年頃から元禄末までの間の刊行らしい）の中の短篇「女の一念来て夫の身を引そひて取てかへる事」（巻五の八）があつて、前掲論文の中で元田氏も、秋成がこの作品から得たものの大きかったことを一応認めている。その内容は大体次の通りであるが、これも部分的な近似であると私には思われる。

丹州田辺の商人が例年の商用で福井へ赴いていたが、ある年福井に女が出来て家へ戻らず、妻へ便りもしない。事実を知った妻の一念が悪鬼になつて福井へ行き、毎夜夫を責めた。恐れをなした夫が、物識りの教えて経帷子を着て臥床していた間は例の悪鬼は近づくことをしなかつたが、たまたま油断してそうしなかつた夜、「あらにくや」という声と共にあたりに血が流れているのを見た。鬼が左股の肉を引き切つて行つたのであつた。これが原因で商人はその後間もなく死んだという話。

元田氏がこれを斥け、構想に大きく係わつてゐるとして提示されたのが都賀庭鐘の『英草紙』（寛延二年刊）の中の「黒川源太主山に入つて道を得たる話」（巻二の四）である。やや長いが、次のような内容である。

——黒川源太主は長生の術を学んだ道人で、次々と移り住んでいる。美人の妻は三度目の妻であるが、金花山奥の庵に住んでいたある日、通りかかった墓地で、ある

女が夫の遺言の再縁可能の日を待ち焦がれてゐると語るのを聞いて帰り、世の女性の薄情を慨嘆した。反論する妻と口論になつたが、妻の言を容れて一応その場は収つた。ところが間もなく彼が重病で死に、棺は室内中央に置かれた。死の枕元で操を守ると言い切つた妻は悲歎に暮れるが、毎月慰めに来る医師二万の道竜は源太主の教えを受けた独身の男で、妻は次第にこの男を下心に持ち、その下僕から道竜の心や近く結婚する事などを聞き出してわが心を伝えさせるが、道竜が固辞する。そこで直接に伝えようと亡夫の棺を外へ出し、本人を呼び寄せ、漸く来た道竜に亡夫を悪し様に言いなした上で契りを迫つた。その時道竜は持病の心痛で急に倒れる。「平常は生きた人間の脳髓を用いた秘薬でこれを救うのだが、今日は生憎持ち合わせない。然し死者のでも死んで四十九日の内だつたら効果があると聞いている」と下僕が言うや否や、「それは容易な事」と妻は走り出て、自ら夫の棺の蓋を打ち割つた。すると屍が欠伸をしながら立ち上がり、妻を先立てて家に入つたが、そこには道竜とその下僕の姿がない。「分身隠形の法」によつて源太主がその二人になつていたのである。夫の詰問と追究に進退窮まつた妻は即座に縊死する。妻の屍を先の棺に入れた源太主はそれを庵と共に焼き払い、更に山深く入つたという

話。

この作品は早く後藤丹治氏が部分的に典拠としていたものであったが、元田氏は新しく全体に關与するものとして提示されたのである。

元田氏の説は私には賛成しかねるものであるが、氏は正太郎の「奸たる性」が右の作品の「女の淫らな本性」に当ると考え、そのそれぞれが夫婦の信頼關係の破綻を招き、正太郎の殺害、未亡人の自殺はその結果だと説く。そして「吉備津の釜」では「賢婦と愚夫」が、源太主の話では「愚婦と賢夫」がそれぞれ描かれているのだとして、両作品は「愚者賢者の性別―夫婦の立場が転倒した形でちょうど双方が一致をみる対照的な設定といつてよい。」と述べている。

然し、道術を使って妻の貞節を試すというのが右の作品のテーマと考えられるが、そうだとすれば、貞節を主張する妻の言葉を源太主が疑った時点で、既に夫婦間の亀裂が生じている筈であるから、道術を得た男であるとは言つても、かゝる源太主を果して「賢夫」と言い得ようか。また先に縷々述べたように、表面的な貞節だけを見て磯良を「賢婦」と言い切るわけにはいかない。表面的に貞節の行為や主張があつても、それぞれの女性にはそれぞれの潜在する異なる「性」のあることは人間心理の実際ではなから

うか。そうした人間の心の深層を秋成は覗き得た作者であつたからこそ『雨月物語』は書かれたのではなかつたか。「白峯」の崇徳上皇、「青頭巾」の僧を始めとする各篇の主人公に凡て心の深層の描かれているのは明瞭なことであつて、ひとり「吉備津の釜」の磯良が例外である筈はないのであるから、この作品に妒婦が描かれていないとする論者は『雨月物語』をどのような書として捉えているのであろうか。

以上の理由で私は折角ながら元田氏の論に賛意を表し得ないし、もし元田氏がこの論を典拠論として提示されたのであれば、前述した西鶴の作品こそ典拠と呼ぶに価すると思ふのである。西鶴のその異色ある作品を基に、遊女を家庭の妻に置き換えて一般的な状況のものとし、同時に登場人物の心理を更に複雑なものとする事で怪奇性を増加させ、想像を絶する結末に導く作品とする事に成功した、それは秋成にして始めて可能のことであつた、と考えるのだが、無理だろうか。

以上に述べたことと直接の關係はないが、ことの序でに述べておきたいことがある。

元田氏は磯良の折角の志を無視した正太郎の行為を「残忍」という言葉で評しているが、この裏切行為は磯良の束縛から逃れたいばかりにとつた欺しであつて、卑怯で狡か

つたことは許されなければならないけれども、「残忍」は酷評だと思う。もつとも磯良からすれば怨み骨髓に達したのであるが、然し正太郎の行為は磯良を憎んでのことではないし、罪の意識も軽かった。「かりそめなる徒こと」ぐらいの意識だったかもしれない。それにもかゝらず彼の殺されようはそれこそ残忍で凄惨を極めていた。それとこれとは些かバランスがとれないように思われる。

井筒の場合と比較して思うに、甚左衛門には他に女がいなかったし、彼は正太郎のように欺すことをしなかった。彼はたゞ井筒から逃れようとしただけであつた。そこに大きな相違がある上に、男を独占しようとの思ひの激しさは井筒と同じであつても、磯良にはそれに大きな怨みと憎しみが加わつた。そこにあの残忍な殺害が行われたと考える方が妥当だと思う。男の形骸を咄めなかつたことは井筒も磯良も同じであるが、磯良の場合は正しく殺害であり、血を滴らせ髪だけを残したというのは、食うことによつて自分と一体化したのだとしか考えられないのである。それを裏切に對する怨恨の報復だけと受取つてしまうことになる。嫉妬の要因はなくなり、畢竟はこの作品には妒婦が描かれていないことになる。元田氏を含めて一般のこのような割り切り方は当たらないと思うが、如何。

六、補強——陰陽師の趣向

『雨月物語』では「吉備津の釜」の次に「蛇性の姪」が置かれている。この作品では男をどこまでも追うのが蛇であり、話の推移や結末に大きな相違はあるけれども、両作品のテーマには共通するところがある。ところで、「蛇性の姪」の主要な典拠は周知のように中国の白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」である。これに對して「吉備津の釜」の典拠が日本の古典である。と考えるのは、いさゝか都合がよすぎるかもしれないが、私は先述した西鶴の「反故尋ねて思ひの中宿」がそれであつてもよからうと思う。たゞ此の作品には「吉備津の釜」の最も読者の目を惹く御釜祓と陰陽師の登場との趣向が欠除している。御釜祓を趣向と称するには異論があるが、秋成の作品では右の西鶴作品を大きな典拠として、これに加えられた趣向が御釜祓であると考え。御釜祓のことについては別に考察すべきであらうし、現に研究が行われているようである。

私はここに陰陽師の趣向の、典拠とまでは言えないにしても酷似の内容を持つ、これも西鶴の作品を挙げてみたいと思う。「魂よばひ百日の楽しみ」（『新可笑記』巻二の六）がそれである。次に簡単に内容を記す。

——先祖を武士とする駿河の大商人の十九歳になる一

人息子が主人公。彼がある時大好きな「大々将棋」を友達との対局中に頓死した。近く武家方から妻を迎えることになつてもいるので両親が悲歎に暮れ、人の言うに任せて富士山麗の大宮から評判の陰陽師を呼んで占わせたところ、「定命であるから仕方がないが、先例もあることだからへ唐土の魂呼たまばいの法」を行つてみよう。しかし昔はとも角、今は末世のことだから、一旦は蘇生しても百日目には必ず絶命するが、それでもよいか」と言う。それは覚悟の上と、頼んで魂呼の法をやつて貰つたら幸いに蘇生した。しかし百日は瞬く間に立ち、その日が近づいた。諸神に長命を祈りもしたが、本人に事実を語ると悲しむこともしなかつた。然し思い残すことのないようにと十分樂ませた上、氣を替えさせたら死なずに済むかもしれないと結婚を急がせた。娘の母親は洩るが、娘は一旦夫と定めた以上は一日添うだけでも満足と言う。然し息子の方は未婚の妻に離縁状を渡す。娘はそれを悲しんで、尔後人に逢おうとしなかつた。

さて百日目。夕刻まで安倍川に賑々しい遊山の舟を浮かべたが、事もなく暮れた事をよるこんで皆々静まつた時、「罌の森」の方から当人を呼ぶ不思議な声が聞こえ、慌てて舟を漕がせたが、その声は次第に頻りになり、それにつれて舟もその方へ引かれて行く感じになつた。当

人の心が急速に空ろになつたので皆が盛んに声を掛けるうち、遂に絶命したという話。娘はその後尼姿となつて男の菩提を弔つたという。――

陰陽師が出るだけで、あとは全く違ふ話のようだが、次の諸点で「吉備津の釜」と共通していると思う。

- (イ) 何れにも有能な陰陽師が紹介されており、各々その指図に従つて作品主人公の延命を図っている。
- (ロ) 陰陽師が、一たびは臨死状態になつた若者の余命を予言し、実際の日数も予言の通りであつた。
- (ハ) 若者の最期が共に不思議な現象の中であつた。
- (ニ) 正太郎が袖の死を悲しんで「招魂の法をもとむる方なく」云々と言っている、その「招魂の法」が他方では「唐土の魂呼たまばい」として実際に行われている。
- (ホ) その「魂呼」の実行法が具体的に描かれているが、これに相当する具体的記述が「御釜被」かと思われる。
- (ヘ) 娘の結婚について氣遣う母親の気持ちは何れにも書かれている。「是母親の愚痴なるゆへそかし」(西鶴)、「まことに女の意こころばへなるべし」(秋成)。
- (ト) その娘は何れも一旦定められた縁談を翻そうとしていない。一は武士の娘、一は由緒ある神主の娘である。

(男の先祖は何れも武士)。

さて、「吉備津の釜」は次の文で終りが結ばれている。

されば陰陽師が占^{うら}のいちじるき。御釜の凶祥^{あしききざ}もはたた
がはざりけるぞ。いともたふとかりけるとかたり伝へ
けり

題名通りに此の作品は御釜祓の趣向だけで終始してもよ
かったのではないか。しかし最初の発想はそうであつたの
かもしれない。そこへ途中から陰陽師を登場させることで
単調に流れるところを防ぐことにした、私はこのように推
測する。御釜祓の占も、話の途中から参加した陰陽師の占
も、結果の凶なることにおいて一致する。この途中からの
趣向のダブルセは、もちろん怪異の二段構成と密接に係わ
るものであるが、これによつて作品に絶妙の深さと厚みと
を加えるものになつたのである。この際の後段の着想が西
鶴作品からのヒントによつたと考えることに無理があるだ
ろうか。

更に推測するのだが、作品の妒婦はもとと吉備津神社
神主の娘でなければならぬというものではなく、御釜祓を
趣向の中心に据えることでこの磯良が設定されたのであつ
た。『雨月物語』からかなり後の作品と思われる「鶉居倭哥
集」所収の歌に「トとひて吉備津の釜のあしきねにおもひや
ます恋に死な、ん」がある。―参考）。またその「磯良」とい

う名も吉備津神社との係わりから付けられたかと思われる
ふしがある。神社の所伝に「溫羅」という鬼を埋めたこと
があり、この音の「ウラ」が磯良「イソ（ウ）ラ」の中に
含められていると考えられるからである。「磯」には「激
しい」の意がある。

それはとに角として、結尾の文において併記せられてい
るにもかかわらず、作品では釜祓のことが優先的に扱われ
題名にもされているというのは、やはりこの方が陰陽師の
ことよりも特殊なだけに作品効果があると考えられたから
であろう。又それと同時に、「反古尋て思ひの中宿」とい
う西鶴作品との類似性を打消すことで、独創的な作品であ
ることを強調しよう、という意図によるものであつたのか
もしくない。我々読者に類似が容易に気付かれないことも
事実である。

西鶴の右の作品は、西鶴作品全体の中でも異色の題材が
扱われている。西鶴同様に人間心理の機微に聡かった秋成
が此の作品に目をとめなかったとは考えられない。敢えて
「典拠」とは言うことが出来ないとしても、この作品から
大きなものを得、更に同じ西鶴作品である「魂よばひ百日
の楽しみ」からもヒントを得てこれを以て補強し、迫真的
な表現と魅力ある文体によつて更に異色ある名作「吉備
津の釜」が創作されたとき、秋成の手腕にあらた

(二九一六・六一四)

本稿は昭和四十九年笠間書院発行の拙著『西鶴文学研究』所収の小篇「妒婦の話」を改めて詳論したものである。

なお縁起類には悪鬼の跳梁を具体的に記したものがあり、もし秋成がこれを閲覧、もしくは内容を伝聞したとすれば、磯良の死霊の夜毎鬼となつての跳梁の描写は、これから得たイメーヅに基づくものかも知れない。―以上は本稿執筆後、小早川健氏の御教示でその存在を知り得た『神道大系』『神社篇』記載の事項を一覧して付記したものである。

「反古尋て思ひの中宿」

